

共愛社理事者の一人は、曾つて編者に告げて、

『共愛女學校歴代の校長中、川合信水氏は人物でありましたが、其の以外に於て傑出した人は現校長周再賜先生であります』

と言つた。かく其の人を名ざして品臨することが、良いかわるいかは知らないけれども、編者も又其の言を首肯せざるを得ない。

諸學校の校長には夏冬の休暇があり、勤務時間と自由時間といふものがあるけれども、周校長にはそれがない。周校長は校内に居住して、敢て自ら自由時間といふものを有たんとせず、定期の休暇を取らうとせず、身も心も學校を離れたことなく、學校を生活して寧時なく、學校の爲に生命を賭けてゐる。若し夫れ病臥の時と雖も、校務を他人に委ねることはしない。醫師が絶対安靜を求むるが如き場合に於てすら、尙且つ校務の爲には面會を謝絶しない。忠實以上の忠實である。斯うして周校長の過勞は、屢々學期末に於て校長を病囚とした、幸に病臥せずして済む場合は奇蹟と做すべきである。

更に又、教育に熱心なること周校長の如きは稀有である。素より教育家であるからには、教育に熱心なればとて、开は當然の事であるといふ者があるかも知れない。併しながら教育家必らずしも教育の熱心者ではない。世の所謂教育家の多數者は、教育の型式を整ふるを以て能事と做し、巧みに號令をかけ得るを以て足ると思つてゐる。周校長に至つては、其の托せられたる全校生徒を以て自家の責任となし、一人々々の個性を理解し、其の卓れたる人格と精神とを以て、學生の人格と精神とに肉迫し、彼らが入學より卒業に至るまでそれ／＼に必要な指導を與へられんとする。其の目

的の爲には、その家庭をも開放し、夫人も又よく校長に協力して盡瘁して居られる、斯の如きは、天下廣しと雖も珍とすべきであり、本校の誇と做すべきであると考へる。

猶、周校長が、時代の趨向を逸早く感知して時局に即應し、克く決戦下の帝國臣民としての正しき女子教育の方針を樹立して誤らず、現下の事態に善處せられつゝあることは、我等の喜び感謝し且つ誇とするところである。

### 修史の後に

以上、勿卒の間に成したところであるから、甚だ不完全ではあるが、一應本校の歴史の編述を終了した。こゝで編者として、尙一言を加へさせて頂きたい。

本校は、今や大東亞戰下皇國興隆の大機に際し、此の熾烈なる戰火を冒して、赫々の『皇運を扶翼し』奉り、東亞大建設の宏業に參與し得る皇國日本の眞女性を打成し、一片報國の赤誠を披瀝せんことを志し、幸にして全校四百三十有餘名の者が教職員も生徒も一丸となつて貽勉努力し、着々使命に邁進してゐるのである。我が皇國としては、藐々二千六百有餘年の史上に於て、未だ曾て現時ほど素晴らしい時代を見たことはなかつた。今は實に、我が建國以來初めて見る光輝ある時代であるが、此の皇國の大使命を認識し、皇國の要請に即應すべき不斷不退の心構を堅持して來た本校としても、皇國の昌榮と共に校運の進展を見、今日は、本校史上曾て見ざるの盛運に乗じてゐると思はれる。是れに、深き神寵に由り、上一天萬乘の御稟威の下、有難き國家諸衆の洪恩による所と感激して、尙も熱志奉公の誠を盡したいと力めて居るのである。が、同時に思ふことは、今日本校を斯く在らしむる爲に直接盡瘁せられた幾多の恩人たちのことである。本書中其の芳名を載錄し

たるものは、極めて少數の著しき人々に過ぎない。茲に登掲の榮を得なかつた方々にして、或は常議員として、或は教員として、或は職員として、忠信以て本校の爲に奉仕したる夥しき人々が有る。彼らの或る人々は、或は無給で應援し、或は不當なる薄謝で勞苦し、或は無給の奉仕を爲しつつ尙其の上にも本校の經費を助け、或は校外に在つて身心を勞して本校の爲に盡し、或は更に社會の他の方面に向つたならば大に優待せられ相當にやれるであらうと思はれる逸器英材を惜氣もなく本校の爲に獻げ盡して涙のこぼれる様な奉仕をして來た。算へ來れば際限が無い。現在校内に奉仕してゐる教職員諸氏にしても、孰もみな然うした人々である。本校は他の社會のそれの如く奉仕者を優遇しない、教職員の勞苦に相當したる報酬を與へない。本校當局とても、教職員の奉仕に對して、十分に報ひたいと思はないでは無い、唯だ如何せんそれを爲し得ないのである。而して、それを爲し得ないところに於て、本校の特色が維持せられ、活ける動が成されてゐる様に自負し、薄か我らが心を慰め誇に似たるものさへ感ぜしめられてゐるのである。まことに、本校の主義精神を理解することなしに、本校の奉仕者となることはできない。本校は、徹頭徹尾、報國の烈志に本づく奉仕事業である。本校の事業は、實に尊貴なる犠牲と献身との結晶である。編者は、編述の都合上、幾多の奉仕者の令名を一々採録するの煩ひを省いたけれども、彼らの勞功に對しては滿腔の謝意を致してゐる。

本校が今尙、外觀の整はざるが如く、將た内容の缺けたるに似たる様なる様態に在るを以て、本校教育の價値を品階されではならない。本校の眞實なる價値は、其の見ゆる所の形骸に於て存しない、之を今日に育成せしめたる精神に於て在る。まことに、烈々たる敬神報國愛民の志念に燃えて

祖國の將來の爲に、女子教育の事を一念に生き抜いた志士等の精神は、沒すべからざるものである。本校は、既述した所に由つて知らるゝ如く、世間往々にして見受くる學校を喰物にする營利學校とは、全然其の選を異にしてゐる。本書を通讀した人々は、それを理解し得たであらうと思ふ。乃ち、其處に、本校が今日の時代に於て尙、我が國の女子教育に對する一大使命を自覺して存立する所以の理由があるのである。編者は、斯言を做すと雖も、徒らに壯語佳辭を駢列して世人を瞞蔽せんとするものではない。是れ眞に現實指掌、本校の歴史が實證する所を強調したに過ぎない。幸に本書に由つて、本校の關係者等は、本校を再認識せらるゝこととなり、更に從來本校を知らなかつた人々が、本校の眞價を認識せらるゝこととなつたならば、編者の勞は報ひられて餘り有りと倣すべきである。

# 創立以來の教職員

一九六

就任年月日	辭任年月日	氏名	不破唯次郎	立杉林大加今須田藤千浪	石田
明治二十四年八月	明治二十七年三月	井深青柳新芳米樂繩	山村雪清	内田榮太郎	不破唯次郎
明治二十六年	明治四十年十二月	中澤弘道	英語	内田榮太郎	立杉林大加今須田藤千浪
明治二十七年二月	明治四十三年八月	利重	音楽	内田榮太郎	石田
明治二十八年二月	明治三十五年十二月	地理、数学	裁縫	内田榮太郎	不破唯次郎
明治二十九年二月	明治四十四年八月	幹事	國幹	内田榮太郎	立杉林大加今須田藤千浪
明治三十一年二月	明治四十五年十二月	監事	漢事	内田榮太郎	石田
明治三十一年二月	明治四十六年	幹會	國幹	内田榮太郎	不破唯次郎
明治三十一年二月	明治四十七年三月	幹事	國幹	内田榮太郎	立杉林大加今須田藤千浪
明治三十一年二月	明治四十八年十二月	幹事	國幹	内田榮太郎	石田
明治三十一年二月	明治四十九年一月	幹事	國幹	内田榮太郎	不破唯次郎

音樂  
明治二十四年九月  
明治二十七年三月  
明治二十八年九月  
明治二十九年一月  
明治三十一年三月  
明治三十二年十一月  
明治三十一年七月

堀 小白 齋平 大矢 山三 岡山 松伊 田H.  
塩 咲井 竹島 本谷 德 勘十郎 F. H. ノイス  
猛俊 藤山 喜 八清 妙尙 民供篤次郎 バミリー  
愛忠 一浮 淳八 梅尚 供篤十郎

國  
漢  
明治三十一年一月  
明治三十二年三月二十五日  
明治三十二年九月  
明治三十一年四月一日

明治四十二年六月三十日

厚木直三郎、久野正代、香仁代、横山山口、藤井重吉、  
栗田玉美子、中松真琴、大沼竹次郎、谷田屋次郎、大岡  
小田、大谷、谷田、谷合、川迫、津原、川進、久川、  
清木、木起、久ら、茂龍、きん、信興、く、

地圖

四  
三  
二  
一

明治三十三年一月

明治三十四年六月

卷之三

國文  
漢文

女言·卷三

明治三十七年五月

明治三十六年九月

明治三十六年一月

明治二十四年四月

甲子年一月

明治三十四年六月

寺岡片金北斎青青多東高小佐伊岩白津岡松  
澤戸山井村藤柳柳比羅横林藤藤城崎村本本  
精い泰ま美新辰つ厭モみ  
一菊健つ三さ哉米か藏ね榮藏ト寛つ敏靜く

英音體·音體作校裁理裁體理裁音家英  
修身、數學語樂操樂操法長繩科繩操科繩樂事語

明治三十七年五月  
明治三十八年四月四日  
明治三十八年一月十三日  
明治三十八年九月五日  
明治三十九年六月  
明治三十九年九月  
明治三十九年十月  
明治三十九年十二月  
明治四十一年四月二十五日  
明治四十一年一月  
同  
明治四十一一年三月三日  
明治四十一一年四月一日  
明治四十一一年九月一日  
明治四十二年六月二十八日  
明治四十一年四月一日  
明治四十一年十月十六日

明治四十年十二月四日  
明治四十三年三月三十一日  
明治四十一年四月一日  
明治三十九年七月  
明治三十九年十月  
明治四十二年十一月一日  
明治四十年三月四日  
大正二年三月三十一日  
大正十一年八月三十一日  
同  
明治四十一年八月四日  
明治四十二年六月十八日  
明治四十四年四月二十九日  
明治四十三年三月三十一日  
明治四十三年三月三十一日  
明治四十三年十月三十一日

河高小奈岡山大島上依安塚菊吉高野岡高  
合柳菅良田中井村山田村越地田相口  
治けさトモ啓もナマ道サシキ光  
菊子ヘクラ藏とフス造静キ菊ゲヌ子郎隆ラ

合數音家數教家數理家國裁圖裁裁理裁家裁數學，  
理科、數學事語統書統統科統事統操學事樂科史

明治四十五年二月二十一日 大正三年三月三十一日  
大正九年三月三十一日 大正二年二月十一日  
大正五年二月三十一日 大正四年四月三十日  
大正七年七月三十一日 大正八年八月三十一日  
大正四年三月三十一日 大正六年五月三十一日  
大正三年三月三十一日 大正五年三月三十一日  
大正二年二月三十一日 大正七年七月三十一日  
大正五年二月三十一日 大正八年八月三十一日  
大正四年三月三十一日 大正六年五月三十一日  
大正三年三月三十一日 大正五年三月三十一日  
大正二年二月三十一日 大正七年七月三十一日  
大正一年一月三十日 大正八年八月三十一日  
大正一年一月三十日 大正九年三月三十一日  
大正一年一月三十日 大正十年四月三十日  
大正一年一月三十日 大正十一年五月三十日

新狩布同林吉大山福笠黒同佐佐同内豊杉松  
井野施田西口崎原田藤藤田村宮  
ア万里は正まり宗正余太五ゑ晴  
サ作き人郎つ直久さん治人次男入郎郎い子

英語、數學、物理、地歴、字学科道  
體操監事處事務書記、理化習題、華英同體合家音晉同義圖

明治四十三年十月三十一日 明治四十三年二月十四日  
昭和二年三月二十三日 明治四十三年九月十日  
大正三年三月三十一日 大正七年五月三十一日  
大正七年三月三十一日 明治四十三年十二月二十五日  
明治四十三年十二月二十五日 明治四十四年十月三十一日  
明治四十四年十一月三十一日 明治四十五年一月三十一日  
明治四十五年一月三十一日 明治四十四年三月三十一日  
明治四十四年三月三十一日 大正四年五月三十一日  
大正四年七月三十一日 大正四年十一月三十一日  
明治四十四年十一月三十一日 明治四十四年九月二十二日

入石杉丸佐深佐渡福富中助青山深原影佐小

大正五年六月三日  
大正六年三月三十一日  
大正七年七月三十日  
大正八年一月  
大正九年四月三日  
大正九年五月三日  
大正九年八月三日  
大正九年九月三日  
大正九年十二月三日  
大正十年三月三日  
大正十一年三月三日  
大正十二年三月三日  
大正十三年三月三日  
大正十四年三月三日  
大正十五年三月三日  
大正十六年三月三日  
大正十七年三月三日  
大正十八年三月三日  
大正十九年三月三日  
大正二十年三月三日  
昭和元年三月三日  
昭和二年三月三日  
昭和三年三月三日  
昭和四年三月三日  
昭和五年三月三日  
昭和六年三月三日  
昭和七年三月三日  
昭和八年三月三日  
昭和九年三月三日  
昭和十年三月三日  
昭和十一年三月三日  
昭和十二年三月三日  
昭和十三年三月三日  
昭和十四年三月三日  
昭和十五年三月三日  
昭和十六年三月三日  
昭和十七年三月三日  
昭和十八年三月三日  
昭和十九年三月三日  
昭和二十年三月三日

葛吉松大佐、葛吉田原道太郎、柳内宮、堀田中壽郎、大久保口田澤江村藤坂、  
千吉松五、久調柳野内宮、堀田澤江村藤坂、大佐松吉、葛吉田原道太郎、  
寺津千吉松五、久調柳野内宮、堀田澤江村藤坂、大久保口田澤江村藤坂、  
安澤田葉田澤十嵐愛文保秀、さき最加き淑太加、寺津千吉松五、久調柳野内宮、  
安澤田葉田澤十嵐愛文保秀、さき最加き淑太加、寺津千吉松五、久調柳野内宮、  
と精興さ熙安文保秀、さき最加き淑太加、寺津千吉松五、久調柳野内宮、  
み一起だ代得子子雄男索ちよ中壽し郎女禰

音體英國理舍英語、音樂科監長書樂綫語  
樂語課操科監樂語科長書樂綫語

大正十一年三月二十五日  
昭和七年三月三十日  
大正十二年十一月三十一日  
大正十二年七月三十一日  
大正十二年九月  
大正十四年五月三十一日  
大正十三年十月三十一日  
大正十二年九月二十九日  
大正十四年七月三十一日  
大正十五年三月二十六日  
大正十五年二月廿一日  
大正十三年九月十二日  
大正十三年八月三十一日  
大正十四年八月三十一日  
大正十三年八月三十一日  
大正十四年三月三十一日  
大正十四年七月一日  
大正十三年十一月三十一日

角津久井惣治郎道  
勝見伊キヒ  
町田谷城幡  
南八幡  
藤南八幡  
神加加山佐  
岩佐山黒大小大  
虎

英舍校英音生理音體數裁裁件裁理件家生徒

監事操繩科操繩學學操樂監科樂語監語

町 金 上 山 白 平 加 川 片 隅 浅 龜 周 宮 羽 高 添 斎 伊  
田 井 田 井 澄 賀 口 桐 澤 川 崎 前 生 野 田 藤 藤  
正 龜 和 尚 と 精 喜 英 ス 再 常 諒 始 イ  
男 吉 勝 代 子 よ 吉 六 代 英 一 ズ 賜 瞳 ミ 政 三 雄 ツ

英圖數英國家理圖英國理數校圖音體同圖休

語音學語音學科書語音科學長語樂操　　書操

大正十三年十月八日  
大正十四年三月三十一日  
大正十五年四月十六日  
昭和二年四月二十三日  
昭和五年四月十七日  
昭和四年十月十七日  
昭和二年三月二十三日  
昭和四年十月三日  
昭和二年九月三十日  
昭和二年四月三十日  
昭和二年三月二十五日  
昭和二年三月二十六日  
昭和六年三月三十一日  
昭和七年三月三十一日  
昭和八年三月三十一日  
昭和九年三月三十一日  
昭和十年三月三十一日  
昭和十一年三月三十一日  
昭和十二年三月三十一日  
昭和十三年三月三十一日  
昭和十四年五月十一日

射 福岡 西野 中原 井 渡 早 北 中 松 佐 齋 渡 小 高 柳  
堺 田 田 魚 岸 上 田 上 邊 坂 爪 村 本 藤 仁 遠 野 津 澤  
信 玉 キ 恒 英 民 登 、 いせ は だて 義 み ま 辨  
子 吉 ウ 子 子 子 子 美 謙 花 の る マ る 雄 謙 つ さ 造

國英書數音裁英裁音書數音裁英裁家家家家體マツサージ操事事事繩學業繩語繩樂記學語記

赤阿牛星藤大高秋柳阿神龍森狩阿井佐三長  
久津間田野田友野山澤部邊勢野部上藤森百合  
充亮はま子直京勝錦辨季初元實千恵文俊と  
治静治子醇夫子造夫枝子ニ子江一リ子子

數家家殊義著理國書數英裁校裁華數裁裁家

學事事算經記科語學語綱醫道學語事

卒業生數一覽

回  
數  
年  
別

第一回 明治二十五年  
第二回 明治二十六年  
第三回 明治二十七年  
第四回 明治二十八年  
第五回 明治二十九年

本 雜 誌 三 三 七 三 五

選科

藏經科

補習科

五三七三五計

入會者

仲武今津内貞久  
木高橋つね子美  
村副平ゆき子子  
新井副子藏

音數音裁英國

英學業新語譜

卷之十九

市 神牛大小近濱大濱江管根長竹戸相山關岸  
原崎田畑林藤井畑田原秀井岸岡中都川本口  
澄熙愛なみ孝成な吉靜さ良千江澄克保久  
子子子をよ友一を郎郎郎恵だ枝子子子端子

國家體育公博體地數歷生英國華胥國物理  
記心徒記心  
舞語事操心得民物操理學史監經語道得語科科

昭和十七年一月十八日 昭和十六年八月三日 昭和十五年四月九日 昭和十四年五月一日 昭和十三年四月二日 昭和十二年五月三日 昭和十一年六月四日 昭和十年七月五日 昭和九年八月六日 昭和八年九月七日 昭和七年十月八日 昭和六年十一月九日 昭和五年十二月十日 昭和四年一月十一日 昭和三年二月十二日 昭和二年三月十三日 昭和元年四月十四日

昭和十五年八月一四  
昭和十四年六月二十六日  
昭和十五年七月三十一日  
昭和十六年八月十三日  
昭和十六年十二月二十四日  
昭和十五年五月二十八日  
昭和十五年十一月三十日  
昭和十七年三月三十一日  
昭和十七年八月八日  
昭和十七年十二月二十四日  
昭和十七年十二月二十四日

第二十五回  
第二十六回  
第二十七回  
第二十八回  
第二十九回  
第三十回  
第三十一回  
第三十二回  
第三十三回  
第三十四回  
第三十五回  
第三十六回  
第三十七回  
第三十八回  
第三十九回  
第四十回  
第四十一回  
第四十二回

四六九六八六學部五六七六九三四七八六〇四七四五五七五九八

一三一三一一一四三一七一三

一一一 一一一 一一一 五五三三八一九二九

專政部一四七一一二四六五一一一四

一一一 一一一  
一一〇 八〇一 七一三 四三七 四八二 五二七 六一九 六二二 二三三 五〇〇

- 一一一 - - 五 | | | | | | | | | | | | | |

明治三十一年	明治三十二年	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年	明治三十六年	明治三十七年	明治三十八年	明治三十九年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正二年	大正三年	大正四年
第二十四回	第二十三回	第二十二回	第二十一回	第二十五回	第二十九回	第二十七回	第二十八回	第二十六回	第二十五回	第十七回	第十八回	第十九回	第二十五回	大正二年	大正三年	大正四年
明治三十二年	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年	明治三十六年	明治三十七年	明治三十八年	明治三十九年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正二年	大正三年	大正四年	
明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年	明治三十六年	明治三十七年	明治三十八年	明治三十九年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正二年	大正三年	大正四年		
明治三十四年	明治三十五年	明治三十六年	明治三十七年	明治三十八年	明治三十九年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正二年	大正三年	大正四年			

二二二二三二三二三二一〇〇五六三八一六

九九二八七九五七四七一五三二五二一一

三三三四三二三三一一一 二八九三九  
五六七八〇八六九六〇六五三七一

每十年經費一覽

一一〇〇六五五四二二二三一  
七九九一五三四四九八一

一一五三九二一

A horizontal row of eleven vertical black bars of varying heights, arranged in a staggered pattern from left to right.

一五六三八二 | 五六 ||

一一一  
一一六 七四〇 八五二〇 四三五 二三一

$$| \cdot | = | \cdot | -$$

四九五、八〇三  
六〇二、八九六  
五四三、四〇九  
四七五、一一五

二八〇七五九五〇  
二三一三二九四〇  
三〇一〇〇〇〇〇

# 縣市補助金

4

二三六

昭和  
十四年  
十五年  
十三年  
十四年  
十二年  
十一年  
十年  
九年  
八年  
七年  
六年  
五年  
四年  
三年  
二年

一、六〇〇、〇〇  
二、一〇七、〇〇  
三、一〇七、〇〇  
四、一〇七、〇〇  
五、一〇七、〇〇  
六、一〇七、〇〇  
七、一〇七、〇〇  
八、一〇七、〇〇  
九、一〇七、〇〇  
一〇、一〇七、〇〇  
一一、一〇七、〇〇  
一二、一〇七、〇〇  
一三、一〇七、〇〇  
一四、一〇七、〇〇  
一五、一〇七、〇〇  
一六、一〇七、〇〇  
一七、一〇七、〇〇  
一八、一〇七、〇〇  
一九、一〇七、〇〇  
二〇、一〇七、〇〇

敷地建物（昭和十八年一月）

一  
烟宅  
地  
（五反三缺二十五步）  
三、八、三、九、五、六  
一、六、一、五、〇、〇  
五、四、五、四、五、六

建物 名 稱	構 造	坪 數	坪 數	坪 數	坪 數	坪 數	坪 數
共愛館	鋼筋コンクリート	一二〇、〇四	一二〇、七〇	九五、五〇	七五、〇〇	一四六、二〇	一九二、二〇
共愛館	木造亞鉛葺	一二〇、七四	一二〇、七四	九五、五〇	七五、〇〇	五六、七五	五九、七五
育英館	木造瓦葺	一一七、二五	一一七、二五	五六、七五	五九、七五	六六、〇〇	六六、〇〇
記念館	木造瓦葺	五二、三五	五二、三五	四六、〇〇	四六、〇〇	四六、〇〇	四六、〇〇
和館	木造瓦葺	四一、二五	四一、二五	三九、一〇	三九、一〇	三九、一〇	三九、一〇
親和館	木造瓦葺	三八、一〇	三八、一〇	三七、一〇	三七、一〇	三七、一〇	三七、一〇
常設館	木造瓦葺	三七、一〇	三七、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇	三六、一〇

273

58

昭和十七年十二月二十八日印刷（非賣品）  
昭和十七年十二月三十一日發行

編輯兼發行人

前橋市岩神町一三一  
共愛女學校内 管 井

吉

印 刷 人 前橋市岩神町七五三  
桶 口 清 太  
印 刷 所 株 式 會 社 上 毛 新 聞 社 郎 郎  
發 行 所 前橋市岩神町一三一  
共 愛 女 學 校

電話前橋三一一〇番  
振替東京一六一九五番

